

数学と記憶

音楽は風景や感情を記録する。人生のある時期によく聴いていた音楽が、街なかでふと聴こえてきたとき、あらがうすべもなく様々な記憶が呼び起こされ、なんともいえないくすぐったい気持ちになる。

数学にも同じ作用がある。ある時期に書いていた論文は、その時期の記憶と強く結びついている。私の場合、一本の論文を書くのに2、3年かかることが多いので、それだけ分の記憶が論文に記録される。

修士課程の学生だったころに書いた一本目の論文からは、京都で生活を始めたときの不安まじりの期待感や、何者でもない下積み時代の楽しさや苦しき、初めて自分の結果を出したときの高揚感、不器用な数学の、伝えたいのに上手く伝わらないもどかしさなどが蘇る。

二本目の論文は、父方の祖母が大動脈瘤の手術をしたころに書き始めた（ちなみに手術は成功して祖母は今も元気である）。朝から病院に行って、祖母の枕元の小さな机で一日中計算をしていた。手術の最中に待合室で私が延々と描いていた曲面の絵を、不思議そうな目で見ていた母の表情。不安と、薬品の臭いと、蛍光灯の明かりと、温かな生命力の記憶。

三本目の論文を書いていたころには、研究所が耐震工事中で、鴨川沿いの仮研究室にいた。いつもと違うメンバーで、隅の机で身を隠すように、でも確実に周りを意識しながら、自分の中の数学の芽から湧き出てくるワクワクと、負けてやるもんか、という秘めた気持ち。

四本目の論文で行き詰っていたころには、父と祖母と中国の長江を下る旅をしていた。当時ある1つの問題が私の頭の中を占めていて、夜、部屋割りをするときに、祖母が私と同じ部屋にしようと言ったのを、私はつい「数学がしたいから一人部屋がいい」と言って祖母を悲しませた。今でもこの論文を見ると、反射的に胸が少しチクッとする。

最近の論文になると、まだ記憶が整理されきらず、混沌とした感情を伴う。時間がたつと、細かなところがこぼれ落ちて、自分でも思いがけない記憶が残ったりする。

こうして思いだして、ああ、と心から思う。手を抜かなくて良かった、と。流されそうになる場面は数え切れないほどあった。でもどの論文も、もうこれ以上動かない、というところまで手放さななかった。だからこそ、周辺の記憶とともに、自分の確かな歴史になっている。それはとても幸運なことだ。本当に。環境を整え、支え、励まして下さった方々に、心から感謝している。

そういう個々の歴史が集まって、数学の歴史を作る。まるで高次元多様体¹のような、ひとつの成長する塊。局所的に見ると、要素要素にいろんな記憶が付随している。国境もない、人種もない、ドラマを伴った人類の知恵の塊。

今、書きかけのここにある論文には、これからどんな記憶が刻まれていくだろう。いつか思い出すときに、晴れやかな、誇らしい気持ちになれるといい。そのために、ひたむきに、真っ直ぐに、向き合っていきたい。

ちなみに多様体に時間や位置などいろんな情報を記すことで、面白くなることもたくさんある。でもやっぱり、私はトポロジーが好きかな²。へへ。

[すずきさきえ]

¹多様体論、『数学セミナー』2014年2月号特集「多様体がわかりたい」、2017年4月号～7月号「超モース理論をめぐる旅：多様体を見る！（その1～4）」（佐久間一浩）参照。

²トポロジーは計量の入っていない柔らかい幾何学。計量を入れると微分幾何学になる。